

社会技術研究開発事業
平成22年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム「犯罪からの子どもの安全」

研究開発プロジェクト

「犯罪から子どもを守る司法面接法の開発と訓練」

研究代表者氏名 仲真紀子
(北海道大学大学院文学研究科、教授)

1. 研究開発プロジェクト名

犯罪から子どもを守る司法面接法の開発と訓練

2. 研究開発実施の要約

① 研究開発目標

事件や事故に加え、家庭内の虐待から子どもを守ることも緊急の課題となっている。子どもの安全を確保し、問題の解決を目指すには、事実確認が要となる。本プロジェクトの目的は、基礎的研究にもとづき、司法面接法およびその訓練プログラムを開発すること、専門家に対するトレーニングを提供することである。具体的には、以下の3点を目標としている。

- (1) 基礎研究の成果にもとづき、司法面接法とその訓練プログラムを開発する。
- (2) 4年間の期間中に、年延べ少なくとも36人、計144人以上の専門家を対象に面接法の訓練を実施し、効果を測定する。
- (3) (1) (2) の成果をもとに面接法と訓練プログラムのパッケージを作成し、社会に提供する。

② 実施項目・内容

上記の(1) (2) (3)に沿い、実施項目、内容について述べる。

- (1) Memorandum of Good Practice (英国内務省・保健省によるガイドライン)、NICHD プロトコル (米国国立子ども健康・人間発達研究所によるガイドライン) にもとづく面接法、ガイドラインを拡張し、北大司法面接ガイドライン2010年度版を作成した。
- (2) 道内を中心とした研修者延べ48人 (24人の研修者×2クール) に加え、日本子ども家庭総合研究所の山本恒雄氏、カウンセリングルーム丸山の臨床心理士である丸山恭子氏とも連携し、関東、東海、関西、東北の各地域における児童相談所職員 (計約150人) を対象とした研修支援を行った。
- (3) 以下の基礎研究課題、すなわち (i) 幼児、児童による感情表現、(ii) 面接における道具 (人形) の使用、(iii) 報告の正確性に影響を及ぼす要因 (情動、面接の繰り返し)、(iv) 面接者に対する反対尋問、(v) 録画におけるカメラアングルの効果、(vi) 人物同定について、研究、調査を実施した。

以上により、基礎研究を踏まえ、2010年版のガイドライン、ならびに教材を作成した。また、司法面接を実施できる専門家 (児童心理司、児童福祉司等) は道内で約50人、道外で約300人となった。

3. 研究開発実施の具体的内容

(1) 研究開発目標

本プロジェクトの目標は、上記の通り、(1) 基礎研究の成果にもとづき、司法面接法とその訓練プログラムを開発すること、(2) 4年間の期間中に、年延べ少なくとも36人、計144人以上の専門家を対象に面接法の訓練を実施し、効果を測定すること、(3) (1) (2) の成果をもとに面接法と訓練プログラムのパッケージを作成し、社会に提供すること、である。

この目標を達成するために、仲グループは研究部門 (基礎研究、情報収集、開発研究)

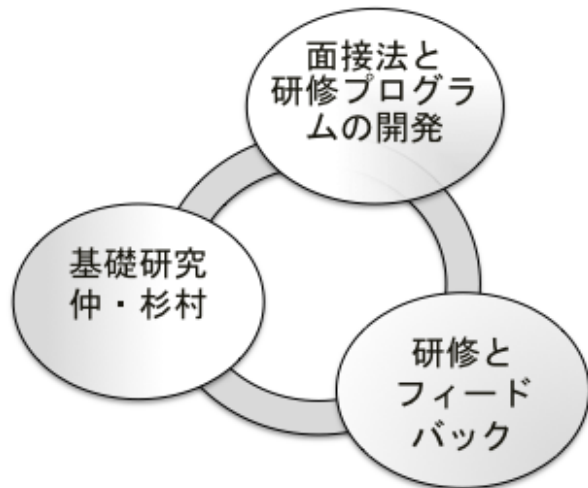
と研修・応用部門（研修，現実事例への適用）を設け，活動を行う。また，杉村グループは，日本ではほとんど明らかにされていない，子どもによる人物同定の基礎的知見を明らかにする。

（2）実施方法・実施内容

【仲グループ】

仲グループは，例年通り，（1）基礎研究や一昨年度までの実績を踏まえ，面接法および研修プログラムを作成し，（2）それにもとづき研修を行い，フィードバックを得るとともに，（3）研修等で得られた重要な課題を基礎研究へと投入する，という方法で研究を実施した。

- （1）面接法については，面接の流れに沿った面接ガイドライン（北大司法面接ガイドライン2010年度版）を作成した。また，教材（シナリオ，面接キット，教示，書き起こしツール）を充実させた。研修においては，ロールプレイを録画して講師がコメントする「振り返り」を重視し，この回数を増やした。加えて，道内児童相談所の職員（関与者）や面接室員が講師として活動できるように，その教育も開始した。
- （2）道内を中心とした研修者延べ48人（24人の研修者×2クール）に加え，日本子ども家庭総合研究所の山本恒雄氏，カウンセリングルーム丸山の臨床心理士である丸山恭子氏とも連携し，関東（東京2回），東海（静岡），東北（盛岡）において，それぞれ3日間の研修を実施した。各回の参加者は23-36人であった。また，研修後，約半年後に，フォローアップ研修を実施した。フォローアップ研修は，関東（東京2回），東海（静岡），関西（奈良）の4カ所であり，それぞれ1日であった。各回の参加者は23-36人であった。
- （3）司法面接の現場で問題となる，以下の研究課題について，心理学実験の手法による調査研究を引き続き実施した。（i）幼児，児童による感情表現（幼児，児童に人形劇を提示し，登場人物の気持ちを答えてもらう），（ii）面接における道具（配置図，人形）の使用の効果（幼児に，映像を提示し，内容の報告を求める。道具のある条件とない条件とで，報告の量や正確さを比較する），（iii）報告の正確性に影響を及ぼす要因（情動，面接の繰り返し）（大学生の参加者を対象に，提示する映像刺激の情動性の有無が，想起内容の正確さに及ぼす影響を検討する。また，面接を繰り返すことが，報告の量や正確さに及ぼす影響を調べる。），（iv）面接者に対する反対尋問（司法面接を行った者が受ける可能性のある反対尋問について検討する），（v）録画におけるカメラアングルの効果（司法面接における録画の仕方が，供述の任意性判断等に及ぼす影響を調べる）。



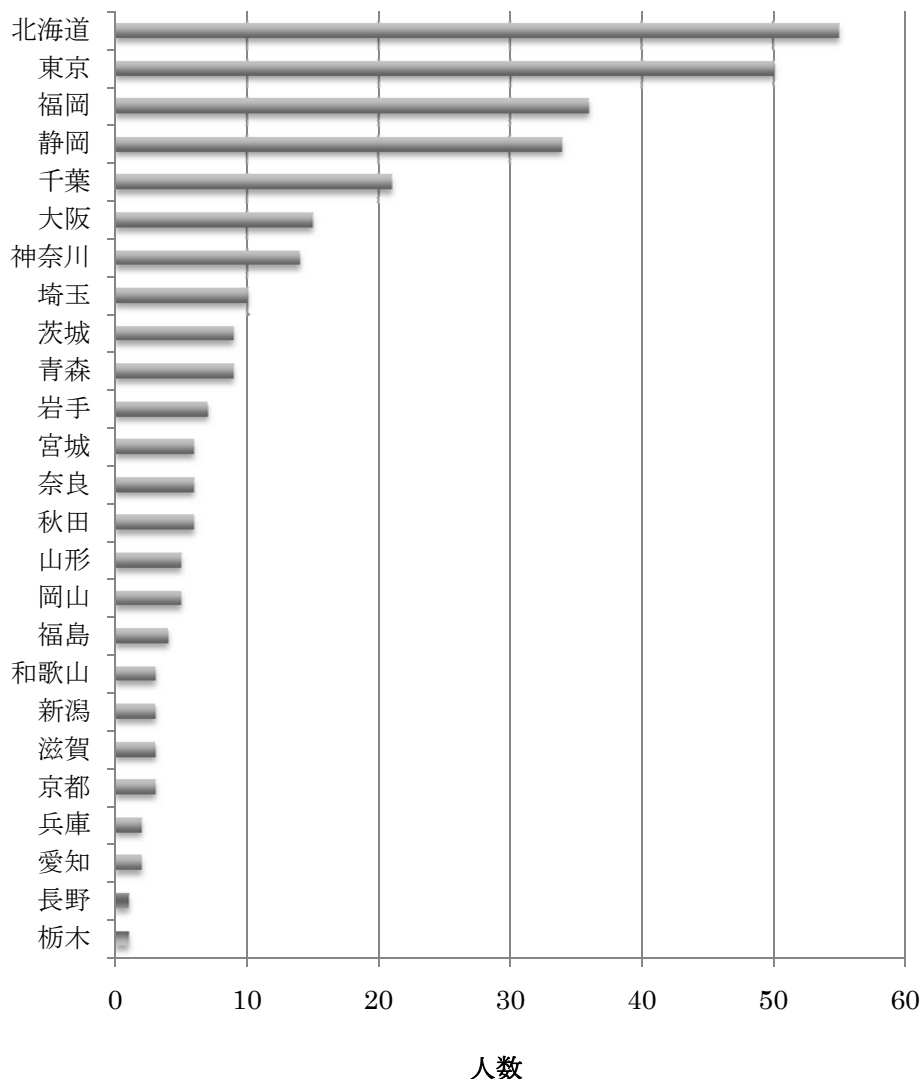
【杉村グループ】

杉村グループは、幼児の顔識別の特性を、(1) 現実場面に即した実験的研究と、(2) 眼球運動測定装置を用いた分析的な研究の2方向から検討した。

(3) 研究開発結果・成果

21年度までの進捗をまとめた上で、22年度の進捗および成果について記述する。

- (1) 21年度は、英国の面接法ガイドライン (Memorandum of Good Practice) から開始し、NICHDプロトコル(米国国立子ども健康・人間発達研究所によるガイドライン)を取り入れ、一定のガイドラインと研修プログラムを作成したが、22年度はこれを拡充した。面接法については、基礎的知見を取り入れ、面接室、面接者、設備等の情報も加えた北大司法面接ガイドライン2010年度版を作成した。また、振り返り(ロールプレイを録画し、講師がコメントする)を重視した研修プログラムへと発展させた。
- (2) 21年度は、道内を中心とした研修者延べ48人(24人の研修者×2クール)に加え、子どもの虐待防止センター・山梨県立大学の西沢哲氏らとの連携で、東京と福岡で、また、日本子ども家庭総合研究所の山本恒雄氏、カウンセリングルーム丸山の丸山恭子氏と連携し、奈良でそれぞれ3日間の研修を実施した。22年度は、道内の延べ48人に加え、関東(東京2回)、東海(静岡)、東北(盛岡)において、それぞれ3日間の研修を実施した。これまでに研修を受けた者の数をグラフに示す。



- (3) 昨年度から継続して行われた心理学実験の主たる結果は、以下の通りである。(i) 幼児、児童による感情表現（子どもはいわゆる感情語のみならず、行為の記述、希望、疑問等の発話により、「気持ち」を表す。語彙数は学童期を通じて増加する。「発達心理学研究」に掲載）。(ii) 面接における道具（人形）の使用の効果（人形を用いると、空間的配置に関する記述は増加する。しかし、一方で代名詞が増える、言語化への動機づけが低まる等の問題もある。「発達研究」に掲載）。(iii) 報告の正確性に影響を及ぼす要因（情動は誤情報による記憶の汚染を抑制する場合がある。「法と心理」に掲載。面接の繰り返しについては、普通面接を行った場合に比べ、司法面接を行った場合、記憶の汚染は少ない：継続中）(iv) 面接者に対する反対尋問（反対尋問においては、面接者の立ち位置、資格、面接技法等が尋問の対象となり得る。「法と心理」に掲載）。(v) 録画におけるカメラアングルの効果（司法面接における録画の仕方が、供述の任意性判断等に及ぼす影響を調べる：継続中）。これらの成果はガイドラインや、研修者との質疑応答、問い合わせへの回答等において用いられている。

【杉村グループ】

20, 21年度は、以下の(1)の観点から2つの実験研究（顔再認の正確性に及ぼす言語供述の影響、顔再認の正確性に及ぼす変装等による人物の外観の変化の影響）を行い、(2)の観点から、眼球運動測定装置を用いた人物同定・性別判断時の処理情報分析のための実験準備を行った。

- (1) 顔識別や人物の言語記述に関する現実場面に即した実験的検討を行い、子どもによる人物同定の正確性に影響する要因を明らかにする。
- (2) 顔や人物同定の特徴を眼球運動測定装置で記録・分析し、子どもが人物識別を行う際の利用情報の特長を明らかにする。

22年度も引き続き2つの観点からの研究を行い、(1)の観点から「顔再認に及ぼす繰り返し質問の影響」（研究1）、(2)の観点から「顔の性別判断時の視線分析：幼児と成人の比較」（研究2）を行った。それぞれの実施方法と実施内容は、以下の通りである。

（研究1）顔再認に及ぼす繰り返し質問の影響

①目的：同一人物について時間間隔をおいた複数回の顔再認テストが行われた場合に、幼児の反応が変化するかどうかを検討した。

②調査対象者：幼児75名（3歳10ヵ月～6歳10ヵ月、平均年齢5歳4ヶ月）

③方法：8分間程度の2名の人物が登場する出来事を目撃し、出来事を目撃してから1日後と約1ヶ月後の2回、同一の2種類の再認テストを行った。

・顔再認1：出来事に登場した人物の写真とディストラクタ5枚のラインナップを同時提示し、その中に出来事に登場した人物が「いる」か「いない」か「わからない」かを判断させた。

・顔再認2：顔再認1で「いる」と答えた者のみ写真選択を行わせた。

④結果と考察

表1は、1日後と1ヶ月後の反応の変化パターンとそれぞれの人数(%)を示したものである。顔再認1では75名中26名(34.7%)の反応が変化し、特に、1日後にはわからないと判断したが1ヶ月後には、ラインアップにいるもしくはいないと何らかの判断する者が多い傾向にあった。顔再認2については、41名中30名(73.2%)の反応が変化し、特に、1日後と1ヶ月後で異なる人物の写真を選択する者、また、1日後にはわからないと判断したが1ヶ月後には誰かの写真を選択する者が多い傾向にあった。これらの結果から、時間をおいた複数回の顔再認を行わせると、「わからない」という正しい自己のモニタができなくなり、何らかの(自己の記憶を反映しない)判断をしてしまう可能性が高くなるといえる。

(研究2) 顔の性別判断時の視線分析：幼児と成人の比較

①目的：幼児が行う顔の性別判断は、顔の内部情報に基づくのではなく髪型等の不適切な情報に左右されやすく、成人と比較すると正確ではないことが知られている。本研究では、性別判断の正確さと性別判断時の視線データにおいて、幼児と成人とでどのような違いがあるかを検討した。

②調査対象者：幼児28名(男児12名, 女児16名, M = 6:0.5:0-6:11), 成人31名(男性16名, 女性15名, M = 19:11, 18:2-22:9)

③方法：パソコンで髪の毛を合成した短い男性髪をした男性と女性, 長い女性髪をした男性と女性, 髪を隠した男性と女性の写真を計12枚モニタに1枚ずつ提示し, 写真の性別判断を行わせた。その際の視線情報を眼球運動測定装置で記録した。図1は, 視線情報(刺激への注視時間と注視回数)を視覚的に表した図の例であり, 円の中心に記述されている番号は注視回数と順番を, 円の大きさは注視時間を表している。



図1 顔刺激への停留回数と停留時間を視覚的表現の例

④結果

幼児は成人と比較すると顔への注視時間と回数が長く、長髪の男性と短髪の女性に対する性別判断を誤る傾向にあった。図2は、刺激への注視割合が多い部分をクラスタとして表したものである。幼児は、若干髪の毛を注視しているが、基本的には成人と同じように顔の内部を注視する割合が多かった。しかし、性別判断においては髪型に準拠した判断を行う傾向にあった。これらの結果から、幼児は顔の内部情報を注視しているが、周辺視野

からの髪型の情報を抑制できないために判断を誤る傾

反応変化パターン	顔再認1		顔再認2	
	人数	%	人数	%
1.別写真選択(1日後と1ヶ月後で異なる写真を選択)	—	—	16	53.3
2.逆の判断1(1日後いる・写真選択→1ヶ月後いない)	3	11.5	3	10.0
3.逆の判断2(1日後いない→1ヶ月後いる・写真選択)	2	7.7	2	6.7
4.判断(1日後わからない→1ヶ月後何らかの判断・写真選択)	15	57.7	8	26.7
5.わからない(1日後何らかの判断・写真選択→1ヶ月後わからない)	6	23.1	1	3.3
合計	26	100.0	30	100.0

向にあることが示唆される。



図2 顔の注視箇所のクラスタ図の例（左は幼児，右は成人）

以上、言語情報を主とする司法面接法とその研修プログラムの研究開発、非言語情報（視覚情報）を主とする人物同定識別に関する研究活動について述べた。仲グループは同じサイクルを繰り返しながら、スパイラルに訓練プログラムを進化させていく。杉村グループで得られた成果は、仲グループで得られた基礎的知見とともに、ガイドラインや質疑応答において用いられる。また、これらの活動は、全体として、司法面接に関わる研究を活性化することにも貢献している（「発達心理学研究」にて「子どもの暮らしの安全・安心：子どもの安全教育の新しいアプローチ」の特集が組まれるなど）。

（4）会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
■会議			
2010年4月13日	2010年度道内研修打合せ	北海道中央児童相談所	2010年度の道内研修のスケジュール等に関する打合せ
2010年9月29日	フォローアップ研修打合せ	北海道大学	日本子ども総合研究所のスタッフとフォローアップ研修打合せ
2011年3月29日	2011年度キャラバン打合せ	北海道大学	日本子ども総合研究所のスタッフと2011年度キャラバンのスケジュールと運営方法の打合せ
■道内児童相談所研修			
2010年10月4日(月)-5日(火)	児童相談所の専門家を対象にした研修/2010年度第1クール1回目	北海道大学	司法面接研修：24時間研修の内の前半の12時間分
2010年11月8日(月)-9日(火)	児童相談所の専門家を対象にした研修/2010年度第1クール2回目	北海道大学	司法面接研修：24時間研修の内の後半の12時間分

2010年12月13日(月)-14日(火)	児童相談所の専門家を対象にした研修/2010年度第2クール1回目	北海道大学	司法面接研修：24時間研修の内の前半の12時間分
2011年1月31日(月)-2月1日(火)	児童相談所の専門家を対象にした研修/2010年度第2クール2回目	北海道大学	司法面接研修：24時間研修の内の後半の12時間分
■道内研修			
2010年11月15日	児童虐待と司法面接研修	札幌市南区保健センター	司法面接研修
2011年2月26日(土)-27日(日)	道内の家裁・司法面接研修	北海道大学人文社会科学総合教育棟W202	道内の家裁の職員を対象にした司法面接研修
■道外研修			
2010年5月17日(月)-19日(水)	「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」 in 東京5月	日本子ども家庭総合研究所	「茨城県、千葉県、新潟市、横須賀市」職員対象の司法面接研修
2010年5月24日(月)-26日(水)	「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」 in 静岡	静岡県中央児童相談所	「静岡県、静岡市、浜松市」対象の司法面接研修
2010年7月27日(火)	暴力被害にあった子どもの話をどう聞くか	松江市国際交流会館イベントホール	「島根県の児童相談所、島根CAP、はまだCAP」対象の司法面接研修
2010年8月17日(火)-19日(木)	「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」 in 東京8月	日本子ども家庭総合研究所	「栃木県、埼玉県、さいたま市、東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、相模原市、長野県」対象の司法面接研修
2010年10月15日(金)	「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」フォ	奈良県文化会館	「岡山県、奈良県、堺市」職員対象の『「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」 in 奈良』のフォローアップ研修

	ローアップ研修 in 奈良		
2010年10月18日(月)	「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」フォローアップ研修 in 東京	日本子ども家庭総合研究所	「茨城県、千葉県、新潟市、横須賀市」職員対象の『「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」 in 東京5月』のフォローアップ研修
2010年10月19日(火)	「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」フォローアップ研修 in 東京 2	日本子ども家庭総合研究所	「栃木県、埼玉県、さいたま市、東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、相模原市、長野県」対象の『「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」 in 東京8月』のフォローアップ研修
2010年10月20日(水)	「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」フォローアップ研修 in 静岡	静岡県中央児童相談所	「静岡県、静岡市、浜松市」対象の『「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」 in 静岡』のフォローアップ研修
2011年1月18日(火)-20日(木)	「児童相談所における被害確認面接実務トレーニング研修」 in 東北	岩手県福祉総合相談センター	「青森県、秋田県、岩手県、山形県、宮城県、仙台市、福島県」対象の司法面接研修
■ 司法面接研究会			
2010年4月23日	2010年度第1回司法面接研究会	北海道大学	年度計画の確認, 事例検討
2010年5月14日	2010年度第2回司法面接研究会	北海道大学	事例検討
2010年7月5日	2010年度第3回司法面接研究会	北海道大学	インディアナ州立大学アニー・ラング先生講演
2010年7月30日	2010年度第4回司法面接研究会	北海道大学	児童相談所業務における司法面接の位置づけ (室蘭児童相談所)
2010年9月5日	2010年度第5回司法面接研究会	北海道大学	加藤治子先生講演
2010年9月28-29日	2010年度第6回司法面接研究会	北海道大学	Salt Lake Criminal Justice Center研修
2010年10月22日	2010年度第7回司法面接研究会	北海道大学	コーナーハウスRATACプロトコルの研修報告 概要と映像

2010年11月19日	2010年度第8回司法面接研究会	北海道大学	東京弁護士会 もがれた翼「雨の記憶」（性被害の告発）視聴とディスカッション
2010年12月22日	2010年度第9回司法面接研究会	北海道大学	インディアナ州マンシー市青少年更生治療施設Youth Opportunity Centerカウンセラー 籠沢敏江先生講演
2011年1月28日	2010年度第10回司法面接研究会	北海道大学	紫明女子学院の次長 丸幸司先生のご報告
2011年2月25日	2010年度第11回司法面接研究会	北海道大学	年度のまとめと報告会

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

(1) 諸機関との連携

自由報告を主とした聴取の方法は、福祉（虐待等における事実確認）、司法（刑事事件や福祉犯罪の捜査）、家事事件（離婚に関わる子どもへの意向調査）等、様々な場面で活かすことが可能である。本年度は、以下の機関において、知見の提供を行った。

- 警察庁生活安全局における「被害児童からの客観的聴取について～誘導、暗示を排除した聴取技法～」の策定のために、知見を提供した。
- 家庭裁判所調査官協議会の依頼により、家裁調査官を対象に、司法面接研修を実施した。
- 日本弁護士会「子どもの権利委員会」における司法面接制度化への取り組みに対し、知見を提供した。

(2) 現実事例への適用と多職種連携

社会実装のためには、知見の普及のみならず、具体的な個別事例に対応することも重要である。本年度は、道内児童相談所、道外児童相談所、子ども家庭相談センター、法務局、教育委員会、弁護士会、検察庁、警察庁等の依頼により、司法面接の実施、すでに行われた面接の評価、あるいは面接実施に関わるアドバイスを行った。

5. 研究開発実施体制

(1) 仲グループ

① 仲真紀子（北海道大学大学院文学研究科、教授）

② 実施項目：司法面接法の開発と訓練

(a) 司法面接と訓練プログラムを開発し、(b) 専門家への訓練と、面接法および訓練プログラムの評価（効果測定）を行い、(c) 最終的には面接法と訓練プログラムのパッケージを作成する。

(2) 杉村グループ

① 杉村智子（福岡教育大学福岡教育大学学校教育講座、教授）

② 実施項目：幼児，児童による人物同定

(a) 幼児，児童による顔，人物の識別に関する文献研究，実験研究を行い，(b) 子どもによる適切な人物同定の方法や教示及び留意事項等を作成し，(c) 面接法と訓練プログラムのパッケージに含める。

6. 研究開発実施者

① 仲グループ (テーマ別)

氏名	フリガナ	所属	役職	担当する研究開発実施項目
仲真紀子	ナカ マキコ	北海道大学大学院 文学研究科	教授	司法面接法の開発と訓練に関わる研究の実施，統括
武田知明	タケダ トモアキ	北海道大学大学院 文学研究科	短期時間勤務職員 (学術研究員)	支援室立ち上げ，HP作成，維持管理，DVD作成，ニューズレター
上宮愛	ウエミヤ アイ	北海道大学大学院 文学研究科	短期時間勤務職員 (学術研究員)	訓練ならびに基礎研究の支援(子どもの報告に関する基礎実験におけるデータ収集，分析)
栗田聡子	クリタ サトコ	北海道大学大学院 文学研究科	短期時間勤務職員 (学術研究員)	訓練ならびに開発研究の支援(訓練における調査，面接資料の分析，参加者へのフィードバック)
中野育子	ナカノ イクコ	北海道大学大学院 文学研究科	短期支援員	訓練および実際の司法面接に医師の立場として助言・指導等
田鍋佳子	タナベ ヨシコ	北海道大学大学院 文学研究科	短期時間勤務職員 (学術研究員)	準備，訓練当日，データ収集，分析等の集中的支援

② 杉村グループ (テーマ別)

氏名	フリガナ	所属	役職	担当する研究開発実施項目
杉村智子	スギムラ トモコ	福岡教育大学	教授	幼児，児童の人物同定に関わる研究の実施，統括

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2010年 7月5日	アニー・ラング教授（インディアナ大学）講演会	北海道大学 人文社会科学総合教育棟 W409	60人	メディア心理学の発展と暴力的メディア研究
2010年 9月5日	北海道大学司法面接プロジェクト講演会	北海道大学 人文社会科学総合教育棟 W409	50人	司法面接と性虐待被害例の検討
2010年 9月28- 30日	Stewart氏とTravis氏（米国ユタ州ソルトレーク子ども司法センター）によるNICHD Protocol Training	北海道大学 人文社会科学総合教育棟 W409	12人	米国でのNICHDプロトコル司法面接の拠点であるソルトレークより講師2名を招き、研修を実施した。国内は10人であり（うち科警研より2人）、韓国からも3人（大学教員、警察官、臨床心理司）の参加があった。
2010年 12月22 日	「米国における青少年更生治療施設の現状」講演会	北海道大学 人文社会科学総合教育棟 W409	50人	主にアメリカの青少年更生治療施設でのご経験や施設の現状について

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

①書籍、DVDなど論文以外に発行したもの

1. 仲真紀子. (2010). 発達の諸相. (三宮真智子, 編). 教育心理学. 学文社. 6-21. (4月)
2. 仲真紀子. (2010). 発達障害をもつ人の記憶と面接. (浜井浩一・村井敏邦, 編). 発達障害と司法非行少年の処遇を中心に(龍谷大学矯正・保護研究センター叢書 第11巻). 現代人文社. 144-158. (4月)
3. 仲真紀子. (2010). 子どもは目撃した人物を識別できるか. (袖井孝子・内田伸子, 編). 子どもの暮らしの安全・安心第1巻. 金子書房. 65-70. (5月)
4. 仲真紀子. (2010). どうすれば子どもの話を聞くことができるか—目撃証言の信用性. (袖井孝子・内田伸子, 編). 子どもの暮らしの安全・安心第2巻. 金子書房. (5月)
5. 仲真紀子. (2010). 司法面接, 供述心理学. (松原達哉, 編). カウンセリング実践ハンドブック. 丸善. 522-523, 526-527. (11月)
6. 仲真紀子(監訳). (2010). 犯罪心理学—ビギナーズガイド: 世界の捜査, 裁判, 矯正の現場から. 有斐閣 (Bull R., Cooke C., Hatcher R., Woodhams J., Bilby C., & Grant T. (2006). *Criminal Psychology: A Beginner's Guide (Beginner's Guides)*. Oneworld Pubns Ltd.) (7月)
7. 仲真紀子 (編著) 認知心理学. ミネルヴァ書房. (11月)

◆ ニュースレター

「犯罪から子どもを守る司法面接法の開発と訓練ニュースレター」発行

2010年10月28日 VOL.4

2011年3月29日 VOL.5

◆ ネット配信による「司法面接通信」の送付

2010年4月6日 第4号

2010年7月12日 第5号

2010年8月16日 第6号

2010年10月15日 第7号

2010年12月3日 第8号

② ウェブサイト構築

◆ 広報・各種サービス

HP (<http://child.let.hokudai.ac.jp/>) を充実させ、面接法やプログラムに関する情報提供や、訓練プログラムへの参加の手配を行った。（立ち上げは20年度）

③ 講演等（招へいされたシンポジウム等の名称、演題、年月日、場所）

- 北海道家庭生活総合カウンセリングセンター」市民公開講座『真実を受けとめる～子どもの安全を守るために～』2010年6月10日（札幌市、カデルホール）
- 日本弁護士会第一回「子どもの司法面接を考える」講演会『子どもの司法面接を考える』2010年6月11日、東京（日本弁護士会館）
- 日本弁護士会「子どもの司法面接を考える」パネルディスカッション、2010年7月3日、東京（日本弁護士会館）
- 北海道子どもの虐待防止協会2010年総会シンポジウム『子どもへの司法面接-司法面接の要と諸外国の状況-』2010年7月10日、北海道大学
- 川崎市子ども家庭センター研修『子どもからの正確な聞き取り-司法面接の取組み-』2010年10月12日川崎市区役所
- 性教育研究会研修会「児童福祉施設における性教育と司法面接」『事実の確認と子どものケア～司法面接と多職種連携～』2010年11月14日（国立オリンピック記念青少年総合センター）
- 北海道オホーツク総合振興局保健環境部児童相談室講演会『子どもから事実を聞くための面接-虐待から子どもを守るために-』2010年11月15日、北海道（北見ベルクラシック）
- JST第4回「犯罪からの子どもの安全」シンポジウム「虐待かも・・・小さなサインを、大きな支援へ」『子どもに事実を話してもらうために』2011年度2月13日、東京（コクヨホール）
- 日本女医会「十代の性の健康」支援ネットワークゆいネット公開シンポジウム『子どもから事実を聞く』2011年2月20日、東京（ルークホール）

7-3. 論文発表 (国内誌 13 件、国際誌 2 件)

1. Barber, S. J.; Franklin, N.; Naka, M.; Yoshimura, H. (2010). Higher Social Intelligence Can Impair Source Memory. *Journal of Experimental Psychology: Memory, Learning and Cognition*. 36, 2, 545-551.
2. 仲真紀子. (2010). 子どもの証言と心理学鑑定. *科学*. 80, 6, 654-656.
3. 仲真紀子. (2010). 性的虐待事例における非加害親への支援. *そだちと臨床*. 8, 127-128.
4. 仲真紀子. (2010). 裁判員の知識と力: 市民が裁判を行うことについて. *法と心理*. 9, 1, 24-28.
5. 仲真紀子. (2010). 司法面接とは何か. *心の健康(北海道精神保健協会)*. 125, 41-43.
6. 仲真紀子. (2010). 子どもによるポジティブ, ネガティブな気持ちの表現: 安全, 非安全な状況にかかわる感情語の使用. *発達心理学研究*. 21, 4, 364-373.
7. Naka, M.; Okada, Y.; Fujita, M.; Yamasaki, Y. (in press). Citizen's psychological knowledge, legal knowledge, and attitudes toward participation in the new Japanese legal system, Saiban-in seido. *Psychology, Crime & Law*.
8. 上宮愛・仲真紀子. (2010). 幼児による人形・道具を用いた出来事の報告. *発達研究*. 24, 25-36.
9. 上宮愛・山本健一・岡田悦典・山崎優子・仲真紀子. (印刷中). 録画された子どもへの面接: 証拠としての価値と法廷における問題. *法と心理学*.
10. 岡隆・仲真紀子・平井洋子. (2010). 学級で研究しようとする人のための心理学研究法入門—研究デザインの視点とデータ収集上の注意—. *教育心理学年報*. 49, 41-44.
11. 若林宏輔・荒川歩・石崎千景・上宮愛. (2010). 法と心理学の協働—10年後の未来を見据えて. *法と心理*. 9, 1, 63-65.
12. 杉村智子 (2010). 幼児の目撃記憶の発達: 顔の再認成績に及ぼす言語供述の影響. *発達心理学研究*, 21, 342-352.
13. Sugimura, T. (2010). Eyewitness memory of a real-life event: Recognition accuracy of young children for a disguised face and a bystander. *Journal of Human Environmental Studies*, 8, 181-187.
14. Sugimura, T. (2011). Young children's responses to repeated facial identifications: A comparison of one-day and one-month delayed tests. *Bulletin of Fukuoka University of Education*, 60, 53-62.
15. 多田伝生・佐藤薫・藤本真由美・小山和利・二口之則・畠中さおり・仲真紀子. (印刷中). 児童相談所における司法面接(事実確認面接)の在り方と課題等について. *北海道児童相談所紀要*.

7-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

① 招待講演 (国内会議 2 件、国際会議 0 件)

- 仲真紀子 (2010). パネリスト「犯罪から子どもを守る司法面接法の開発と訓練」
2010年度11月28日分科会2「司法面接(被害確認面接)の新たな展開に向けて」.
日本子ども虐待防止学会. (熊本県立劇場, 11月27-28日)
- 仲真紀子 (2010). チュートリアル講師「研究デザインの視点とデータ収集上の注意」

日本教育心理学会研究委員会企画チュートリアルセミナー：学級で研究しようとする人のための心理学研究法入門. 日本教育心理学会第52回総会. (早稲田大学, 8月27-29日)

② 口頭講演 (国内会議 1 件、国際会議 1 件)

井上愛弓・仲真紀子. (2010). 面接手法が繰り返し想起された物語に及ぼす影響. 法と心理学会第11回大会. (立命館大学, 10月16,17日)

Uemiya A. & Naka M. (2010). Using normal dolls in children's event reporting: Reporting other people's actions. Paper presented at the 3rd International Investigative Interviewing Research Group Annual Conference, Stavern, Norway, June, 22-24.

③ ポスター発表 (国内会議 11 件、国際会議 7 件)

Naka, M. (2010). Life script and legal age. Poster presented at the conference on theoretical perspectives on autobiographical memory, Aarhus, Denmark, June, 13-16.

Naka, M., Futakuchi, Y., & Koyama, K. (2010). A training program on investigative interviewing with children: Three-day training and its effect on the interview. Poster presented at the 3rd International Investigative Interviewing Research Group Annual Conference, Stavern, Norway, June, 22-24.

仲真紀子・石崎千景・山崎優子. (2010). 被害者・加害者の気持ちを推測する. 日本心理学会第74回大会. (大阪大学, 9月20-22日)

Inoue, A. & Naka, M. (2010). Effect of repeated forensic interviews. Poster presented at the 27th International Congress of Applied Psychology. Melbourne, Australia, July, 11-16.

井上愛弓・仲真紀子. (2010). 質問の形式が想起内容の正確性に及ぼす影響—司法面接の手法を使用して—. 日本心理学会第74回大会. (大阪大学, 9月20-22日)

Uemiya A. & Naka M. (2010). The development of the understanding of truth and lies from preschoolers to undergraduate students. Poster presented at the conference on theoretical perspectives on autobiographical memory, Aarhus, Denmark, June, 13-16.

上宮愛・仲真紀子. (2010). 子どもの証言能力についての素朴理論. 日本心理学会第74回大会. (大阪大学, 9月20-22日)

Oyama, T. & Naka, M. (2010). Narratives of Japanese elementary school children about positive and negative events. Poster presented at the conference on theoretical perspectives on autobiographical memory, Aarhus, Denmark, June, 13-16.

杉野佑太・仲真紀子. (2010). 声の記憶に対して, 言語の諸要素が及ぼす影響の検討. 北海道心理学会第57回大会. (札幌国際大学, 10月10日)

名畑康之・仲真紀子. (2010). 正導事後情報と誤導事後情報が目撃者の記憶に及ぼす影響 - 参加者内比較 -. 認知心理学会. (大阪大学, 9月20-22日)

Nabata, Y. & Naka, M. (2010). The effect of positive and negative leading post-event

information on eyewitness memory within participants. Poster presented at the 27th International Congress of Applied Psychology. Melbourne, Australia, July, 11-16.

- 名畑康之・仲真紀子. (2010). 正導事後情報と誤導事後情報が目撃者の記憶に及ぼす影響 - 出来事を中心・周辺性に着目して -. 日本心理学会第74回大会. (大阪大学, 9月20-22日)
- 名畑康之・仲真紀子. (2010). 正導・誤導事後情報が目撃記憶に及ぼす影響 - 目撃者の確信度に着目して -. 北海道心理学会第57回大会. (札幌国際大学, 10月10日)
- 名畑康之・仲真紀子. (2010). 正導・誤導事後情報が目撃記憶に及ぼす影響 - 出来事の情動性に着目して -. 法と心理学会第11回大会. (立命館大学, 10月16,17日)
- Janssen, S. M. J., Naka, M., & Friedman, W. J. (2010). Why does life appear to speed up as people get older? Poster presented at the Fifty-First Annual Meeting of the Psychonomic Society, St. Louis, USA, November, 18-21.
- 杉村智子 (2010) 幼児の目撃記憶に及ぼす遅延時間の影響：1日後と1ヶ月後の比較 日本心理学会第74回大会発表論文集 p.1117. 2010年9月 大阪大学
- 杉村智子 (2010) 髪型を変化させた顔の同一性判断の正確性と眼球運動：幼児と成人の比較 法と心理学会第11回大会予稿集 p.25. 2010年10月 立命館大学 朱雀キャンパス
- 杉村智子 (2010) 顔の性別判断の正確性と眼球運動：幼児と成人の比較 第15回日本顔学会大会 フォーラム顔学2010 p.125. 2010年10月 東京医科歯科大学

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

① 新聞報道・投稿

- 2010年4月25日 読売新聞 朝刊 京葉版 27ページ 『[焦点]性犯罪被害者、聴取を制限「司法面接」待望論』
- 2010年6月24日 北海道新聞朝刊 (3面) 『<ひと2010> 仲真紀子さん 司法面接の普及に取り組む北大大学院教授』
- 2010年11月18日 経済の伝書鳩 (北見の地方経済新聞) 12面 『子どもから事実聞くには本人の言葉だけを聞くこと 北大の仲真紀子教授が講演』
- 2010年12月24日 読売新聞 「性暴力を問う (下) 『子どもの司法面接普及を』 仲真紀子さん」

② 受賞

③ その他

7-6. 特許出願

① 国内出願 (0 件)

1. “発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号”

② 海外出願 (0 件)

1. “発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号”